

僧子虎鶏虫のゲーム

遊びのルール

- 僧は子に勝つ(僧は子を叩く)
- 子は虫に勝つ(子は虫をつぶす)
- 虎は鶏と子と僧に勝つ(虎は鶏と子と僧を食う)
- 鶏は虫と僧と子に勝つ(鶏は僧と子と虫をついばむ)
- 虫は虎と僧に勝つ(虫は虎の尾と僧の黄衣に穴をうがつ)

子=ドア・ボーイ

(その夜、彼はすぐに深い眠りについた。一日中、頭の中で重苦しい難問が渦巻いていたはずなのに、何の夢も見なかった) 彼のこつこつと音が彼女の顔にバシッと音を立てて炸裂した。さ

ウィン・リョウウーリン 宇戸清治訳

らに足の裏で下腹部に蹴りを入れた。なぐられた女はのけぞり、大きな音をたてて台所のテーブルにぶつかつた後、ドタツと床に倒れ込んだ。炊飯器や台所用品がテーブルから落ち、あたり一面に散らばつた。女は両手でおなかを押さえていた。力まかせに叩かれたので片方の頬が真っ赤に腫れ上がっている。見る間に口から血が流れた。しかし、少しも泣き声をもらさなかつた。

ドア・ボーイの彼が目を覚めたのは五時ころだった。目眩がするうえ、おなかのあたりがむかむかし、今にも吐きそうだった。中風を患った老人のように手が震える。昨夜彼が寝入ったのはまだ宵の口と早かった。起きたてなのにどうして電池が切れた玩具のように力が入らないのか。彼は手を伸ばしてベッドの頭あたりをまさぐつた。しかし、目当てのものはない

めなかつた。彼は洗濯中の妻に、

「サープディーをどこにしまった？」と訊いた。

妻は、

「あんだ、いつになつたらあの薬をやめるの？まるで麻薬中毒みたい」と皮肉を言った。

「サープディーをどこにしまったか訊いてるんだ」

「知るもんですか」

怒りがムラムラと湧いてくる。

「知らないだど？ 知らないとはどついつことだ」

「知らないものは知らないわよ。まるで子供みたい」

「うるさい、このばばあー」

彼のこつい手が彼女の顔にバシツと音を立てて炸裂した。さらに足の裏で下腹部に蹴りを入れた。

引き出しに半袋分のサープディーが残っていたのを思い出すと、床に転がっている妻の上をあえぎながら無造作にまたいでいき、窓のそばにあるばかでかい木製の棚の引き出しを乱暴に開けた。そこには目当てのものはない。畜生、と心の中で呪つた。朝まだ早く大気はとても冷たいはずなのに、大きな汗の粒が額から流れ落ちていく。最近では一日でも飲まないと情緒不安になり、こうやって周囲に当たり散らす。薬なしでは力が湧わいてこないのだ。ぼろ切れのように疲れ切った体を引きずって洗面所に向かつた。目を皿のようにして左右を眺め、剃刀をしまつてある棚で視線を止めた。そこに静かに眠っている

一袋のサープディーを見つけたのだ。そのとたん、彼の目はあつという間に輝きを取り戻した。

それは赤い袋に入っていて、斜めに突き出した大きな親指の図柄の上に白で「サープディー」と書いてある。袋を乱暴に破つてコップに入れた。手が震えていたせいで白い粉の一部がテーブルの上に散らばつた。それを手で掻き集めてコップに入れ、水道栓をひねつた。人差し指をスプーンの代わりにしてコップの中をかき回した。ほどよく溶けると、一気に喉に流し込んだ。それから部屋に戻り、汗と汚れで湿つたベッドに仰向けになつた。目を閉じて時間をかけてゆっくりと息をはく。身体が楽になり、気分も楽になつていくように感じた。彼はあと二、三分、夢の続きを見たいと思つたものの、壁時計の針はそれを許してくれそうになかつた。

身支度を終え、外へ出た。朝靄がうつすらと道路の上に漂い、すべての景色を淡いグレー色に染めている。乾いた木の葉が二、三枚、生け垣に植えられた閻浮樹の枝を離れ、彼の側を舞いながら落ちた。彼は引越して二年になる、築後五〇年以上は経つこの小さくて古い漆喰の家を憎んでいた。あちこちが剥がれ落ちたあとにびっしりとカビが付き、元の状態を想像するのも難しいこの漆喰の壁が大嫌いだった。寝室もトイレも嫌いだった。要するに、彼はここの一切を憎んでいた。

出かける前に、台所の奥にいる妻にちらつと視線を送つた。彼女は身をかがめて洗濯をしていた。顔の右半分が赤く腫れあ

がつている。暴力を振るわれていた間、彼女は一言も泣き叫ばなかった。床に散らばった小白や食器の破片はきれいに片づけられていた。怒りがおさまると、彼は急に妻に謝りたくなつた。しかし、かける言葉が見つからない。かまうものか。結婚して二〇年以上になるし、娘には夫も子供もできた。ここに移り住んで以来、ごく小さな家さえ自分のものにする希望は失せてしまった。それでも彼は、せめて半日でも家の主になってみたいという分不相応な要求をしたことはない。こんな時、他の男だつたらもつと激しく妻をぶつていたにちがいない。ふと見ると、家の前のごみ箱に小白の破片が捨てられていた。彼は今朝の未明にひどく機嫌が悪かつた自分をのしつた。今夜は財布をはたいて新しい小白を買わねばならないことになりそうだ。まったくバカな話だ。

寒さを防ぐごとく手を体に巻きつけて歩き、道路脇の商店長屋の一軒の店に入って座つた。ここは雑多な仕事をしている連中が集まる喫茶店で、朝はコーヒーを、夜は酒を出している。彼は歩道に面したテーブルから道路を行き交う人々をぼんやりと見つめ、彼らの生活を想像するのが好きだつた。財布の中の金を数えた。小白代を払うとすると、朝食には一杯のコーヒーを飲むのがやつとだ。ほかほかした香りがたちのぼる熱い茶色の液体をすすするのに二分を使い、残りの一分で金をテーブルに置いて店を出た。雇われ人という身分が彼がそれ以上の時間をそこでのもんびりと過ごすのを許さなかつた。それでも彼の賃貸ア

パートが職場から歩いてたつた一五分の距離にあるのは幸運な方だ。仕事に飽きると、いつもこれこそが田舎暮らしのいい点だと考えることにして自分を慰めた。都会人のように交通渋滞に巻き込まれる心配もない。ただし、彼の人生では一度だつて都会人と顔を会わせずに済んだことはないのだが。

六時ちょうどに職場に着いた。タイムカードを押す。間一髪で遅刻の赤字を免れた。朝の空気が彼をいくらかさわやかな気分にしていて。朝靄がまだ立ちこめているせいで、暗くて肌寒く、しかも静かだ。ゴルフ場の緑の芝生がくすんだ白い垂れ幕の後方で途絶えている。しかし、彼はそのはるか向こうまで目に見えるように容易に想像することができた。タピオカ畑やフアラン(注：ゲアバの一種で身が白い)やチヨムプー(注：フトモモ科)やノイナイ(注：釈迦頭)の果樹園。いまも水を岸边までなみなみとたたえている運河。それに、村中に響く大きな歓声をあげて川遊びに夢中な子供たち。子供たちは大きなコブの樹に登るのが好きだつた。まだ熟していない緑色の実をとつて、それをゴム銃の弾にし、戦争ごっこをしたものだ。やがて子供の光景は消え、こんどは屈強な体つきをした若者たちが雑草を刈り、土を掘り起こして肥料を施し、イモを掘り、横になつて休み、ご飯を食べ、愛をささやき、結婚し、子供を作る光景が見えてくる。これら一切のことがかつてここで本当に起きたのだ。しかし、時の流れはそれらのすべてを変えてしまつた。今では彼は、ゴルフクラブの制服を身につけ、ゴルフ場に

来た客の車のドアを低腰で開けてやり、客の車を日陰になった駐車スペースに止め、クラブハウスまで客の車を代行運転している自分の姿を見る。数年前まで、この場所はまだ彼には明るい未来を意味していた。しかし、今ではそれは単なる過去の記憶でしかない。

手の震えがやつととまった。いっしょに働いている同僚が声をかけた。

「顔色が悪いぞ。どうかしたのか？」

「いや、ちょっと疲れているだけさ。朝方、サープデーを一袋飲んだからだいぶよくなつた」

「気をつけるよ。倒れでもしたら、妻子が路頭に迷うんだからな」

彼はこの言葉が大嫌いだ。何かというと、「妻子が路頭に迷う」だ。最初の子供がこの世に生まれて以来、彼は家庭生活というものが考えていたほど簡単ではないことに気づいた。彼の妻が四人目の子を身ごもつたとき、彼は自分の人生とはただひたすら重荷を背負つことにすぎないのだと感じた。この世の中は男が弱音を吐くことを認めためしがない。それ以上にもつと悪いのは、毎日年をとっていき、彼の後からもつと若くもつと力持ちの人間が続々と連なって現れることだ。あるいは彼は御用ずみになつた牛が屠殺場に引っぱられていくのと同じように退職させられるのではないかと恐れているのかもしれない。「リストラ」とか何とかいうやつだ。彼の妻は辛抱強くて生活力

があり、節約を心がける女ではあるが、そんなことでは彼の気分は良くはならなかつた。こんな人生が本来の自分の人生であるはずがない。毎日疲労が蓄積する一方で、いつからサープデーを飲みはじめたのかも今でははつきり覚えていないほどだ。

かなり以前になるが、都会の学生グループが農村での薬の摂取状況について調査に来たことがある。一人の若い学生が、

「叔父さん、注意して下さいよ。この種の薬は飲みすぎると体に毒です」と彼に警告した。彼は笑い飛ばして、

「国中、誰だって飲んでるさ」とテレビ・コマーシャル通りのことを言った。

「医者だって飲んでる」

「それはですね、コマーシャルの常套手段なんですよ。テレビに登場する医者は、あれは俳優なんです。本物の医者じゃないんですよ」

「どうして分かる？」

「叔父さんはコマーシャルを全部覚えてますよね。あの中で自分のことを医者だと言つても言つてますか？ 視聴者に勝手にそう思わせたいだけなんです。白衣を着せた人間を登場させて病院の前でしゃべらせているんですよ。それをおじさんは勝手に医者だと思ひこんでいるです」

そうなのか？ 人間の考えることがそんなに奥が深いとは信じがたいことだ。もしそれが事実だとしたら、彼は世間から遅れてしまっているということか。彼の妻はいつも「あんたは本

当に子供みたいね。他人を簡単に信用するし、それに忘れっぽいときている」と言っていた。それを思い出すと、彼はようやくに妻の考えに同意できる気がした。何物かによつて長い間目をふさがれていた後で、ものの見方がにわかには鮮明になったのは不思議なことと思えた。

「本当に信じられない」

彼は何カ月間もこの言葉をつぶやいていた。そんなある朝起きてみると、彼の所有していた家と土地は、ただのただっ広い緑の草地になっていた。大勢の人間がやってきて緑色の水玉のような果樹をなぎ倒したのだ。そこはかつては父の祖父の土地だった。その後、家に届いた弁護士の手紙は彼を呆然と立ちつくさせるのに十分だった。自分の目が信じられなかった。それは彼の土地に関する所有権を主張する書類だった。彼は法的手段に訴えることを決意した。

「一体どうして立ち退かなくてはいけないんだ。ここは本当におれの土地なのに」

区長だけが、

「裁判なんて時間の無駄かもな。費用がかさむだけだぞ。この書類は法的には全部正しいんだから」と真剣に相談にのってくれたただ一人の人間だった。

区長はさらにこうした問題にぶつかったのは彼だけではないこともつけ加えた。

彼は大声で叫びたかった。だが叫ぶには疲れすぎていた。何

十年も前、ある朝彼が起きてみると、長女の姿が一人の若者と共に彼の生活から消えてしまっていたのを知ったときの気持ちと大して違わなかった。その事件の前に娘は自分で自分の人生を選ばせてくれと頼んできたことがあった。娘が家出した後の数カ月間、彼は恥ずかしい思いをした。だが、親子の縁を切つてもいいと思うほどくすぶっていた怒りも、娘が自分の過ちを認めて謝ってくれさせれば、ただちに消えていただろう。その間、彼の妻は一切口出ししなかった。あたかもこの世の中で起きる一切のことを受け入れる人間の目で彼を見ていた。妻は彼より何倍も強い人間だった。

楽観的に見れば、こうした人生を体験したのは彼一人だけではない。それに今の彼の仕事は一日に一〇時間以上も畑仕事に夢中になっていたときよりずっと簡単だ。そうなのだ。区長が新しい地主になったゴルフ場の社長に口を利いて、彼の仕事を見つけてくれることで、少しは生活が楽になるさとアドバイスしてくれた。それで彼の気分はいくらかは晴れた。しかし、数カ月前に区長が社長といかにも親しそうに肩を叩き合つてゴルフをしている光景を目の当たりにしたとき、最初から自分がしくじっていたことを思い知った。彼は笑いたかったが、体力が残っていなかった。心臓が沸騰して、もう少しで溶けてなくなつてしまふそうに感じた。まるで袋小路の野良犬のように。いやそうではない。袋小路の野良犬にはまだ戦つて死ぬチャンスがある。しかし彼にできることは何ひとつ残っていなかった。

その感情はじきに消滅していった。今では彼は何ごととも簡単に許せる人間なのか、それとも単に忘れっぽいだけの人間なのか、確信を持って自分に答えることができなくなってしまうた。

過去の幻影から自分を引き戻した。彼は自分の過去も現在も憎んでいる。今の仕事も憎んでいる。この手のスポーツも憎い。どこが楽しいのか理解できない。まあいいさ。少なくとも、そのおかげでおれは何年もドアを開ける仕事があるんだから。彼は肩をすぼめた。たぶん、これからもずっとそうするように。

朝日が白い靄を追い払った。時計の針が朝の時間帯から自分を引きはがすように振れるたびに、エンブレムで風を切って走る高級車がクラブハウスの車寄せに到着する。八時少し前に一台の黒塗りの車が滑り込んできてクラブに横づけした。車のフロントに輝くピカピカの金属製の虎がまず彼の目に飛び込んできた。吸気口のあたりにメーカーのマークが取り付けられている。名前は覚えていないが、輸入車のなかでも最も代表的なタイプの高級車であることだけはわかった。歩み寄ると、顔に笑みを浮かべておじぎしながらドアを開けた。降りてきたゴルフシャツ姿の男に合掌をする。彼はその人物の顔を自分の親戚の人間の顔よりもはつきりと覚えている。革命団団長の地位は総理大臣よりも人々を怖れさせるものだ。將軍はいつもと同じように朝から三人のボディガードを伴っていた。笑みを浮かべた表情から上機嫌なのがわかる。將軍は彼の手に五〇〇パーツを握らせた。悪くない一日の始まりだ。

社長はクラブハウスのフロントポーチまでやってきて將軍を迎えた。

「將軍のお車だ、くれぐれも気をつけるよ」

社長は特別ゲストを案内する前に彼に念を押した。この二、三カ月間、社長はしょっちゅうある政治家とゴルフをしに来ている。社長の一人息子がその政治家と同じ政党から、この県の代議員に立候補していた。そこで社長には今まで以上に特別な義務が生じたというわけだ。社長と政界の友人たちとの間のゴルフはありふれた光景だった。ほとんど毎回のようになり楽しみを増やすための賭けが行われた。ホールの数で競うやり方だろうが、ホールと道具の総合点で競うやり方だろう。社長はいつも負ける側だった。昨日の夕方、その政治家が同じ派閥の立候補者を連れてきて、市場の集會場で村人に親しげにその男を紹介した。ステージでの選挙演説が終わった後、政治家はこうつけ加えた。

「問題を抱えている方はどなたでもご相談下さい。私が約束を守らないときは、わたしの家を叩き壊して下さって結構です。わたしの家がどこにあるかは皆さんご存じのはずですよ」

村人たちは大喜びで拍手をおくった。彼自身さえ、ついにつこりしてしまうほどだった。

ドア・ボーイは將軍の車を運転して駐車場へ向かった。少し頭がくらくらする気がした。朝飲んだ薬の効き目が切れたのかもしれない。あるいは、車内に充滿している新車の匂いのせい

かもしれない。彼はこんな車を運転したことはこれまで一度もなかった。座席のクッションはピカピカの黒の本革で、彼のベッドとは比較にならないほど柔らかくて快適だった。オートマチックのギアを入れ、車を駐車スペースに向けようとしたり。その時、突然目の前が真っ暗になり、車は鉄製の塀へ突進した。軽く物がぶつかる音がした。彼は慌ててブレーキを踏んだ。急いで車から降り、フロントを調べた。そして、フロントにあった鉄の虎のエンブレムが半ばからぐにゃつと曲がっているのを見たとき、かれは飛び上がりばかりに驚いた。額から一滴の汗が車のフロントに落ちた。心臓がときどき震えた。手もぶるぶると震えてきた。

虎 社長

適度な力を込めてドライバーを叩く。彼の手元はきわめて安定していた。固いボールにヘッドの当たった音がして、白球は一〇〇ヤードほどの距離を飛んで旗の縁に落ちた。バンカーから打つのも悪くない。將軍は手を叩いた。

「腕が落ちてないね」

「閣下こそ」社長が答えた。

五時間の間、二人の男はゴルフと会話に興じた。冷たい空気の中で疲れが来るのも遅い。將軍はきつい香りの葉巻を吸うと、いかにも楽しそうに笑いながら煙を吐きだした。キャ

ディーやボディガードたちは静かにその後をついて移動した。二人が静けさを望んでいることを知っていたからだ。今の社長にとって当面の課題は第八ホールまでに同じ成績に持つていくにはどうすればよいかだった。今の時点で勝ちをゆずるのではなくにも安直すぎる。彼は將軍があまりにも易々とゲームに負けてしまうような弱い相手と対戦するのを嫌っていることを熟知していた。でなければ、国の最高指導者に就こうとする野望を抱く人間がこの手のスポーツを好きになるはずがない。遠くまで視界をめぐらし、シャフトをしつかりと握り、確実に狙いを定め、それから力強く打突しなければならぬ。強いドライバーを使うときもあれば、弱いドライバーを使わねばならないときもある。だが、確かなことは常に冷静さとホールからまた別のホールへと移動していく忍耐が必要とされるといふことだ。

最初がどのように始まったのか、社長はすでに記憶にない。すべては完全に自然な形で始まったように思う。ある時から彼の周囲は、まるで地球が猛スピードで回転するように急速に変化しはじめた。物事のスピードは時を追うことにますます加速していった。將軍はそれに「システム」という名前をつけて呼んでいたが、社長にはそれがなぜか滑稽に感じられてしかたがなかった。だが、表面を見るかぎり完璧にシステムとは無縁であるがゆえに、それは最も奇妙なシステムであると言えた。時間が経つと、彼は一見システムがないように見えることの意味を深く理解しはじめた。変化には無縁のように装いながら、な

おかつ確実に動いているシステムがあるのだ。彼は一日に一八時間も懸命に働いた。連日そのように働いて、ある日ふと顔を上げると、コースの上を走っている人々の先頭にいることに初めて気がついた。サーブディーは最も高い利益をもたらした好例だ。それは名前を「サーボディー」と呼んでいた最初るときから市場に出回っている。厚生省がタイ語で意味のある語を商品名に使用することを禁じたとき、数人の官僚が子音の綴りを変更してはどうかとアドバイスしてくれた。そこでせっかく覚えられた商品名を無駄にしないよう、元のBの代わりに発音の近いPに変更した。コマースシャルでは元のように「サーープディー」と母音を強調した。

彼の競争相手？ もちろん、たくさんいる。彼は敵の力を必要以上に侮ることを決してしない。連中が資金と人材を投入していて、欠けているのは政治とのパイプだけだということは知っていた。攻撃的なマーケティングとは、長期間にわたって低価格路線を続けることと、商店に競争相手の商品を販売しないよう圧力をかけることである（商店側にとっては、彼の社のほかの売れ筋の商品も欲しいので、その圧力を断ることができないようにもっていくことで）。自分の陣地を防衛する戦略の一部は、他のジャンルのビジネスへ向けて小刻みな攻勢をかけることだ。それが市場占有率の拡大につながる。彼が気に入ってヘッドハンティングして顧問に迎えた、MBAを持つ大学教師はいつも「ビジネスは流れに逆らって船を漕ぐのと同じ

だ。前進しなければ押し流されてしまう。だから巨大化したら分社しなくてはならない」と主張する。数年後にはサーブディー・グループは金融市場に向けて高いハードルに挑戦する。ほかの部門のビジネスを立ちあげるのだ。その中には不動産ビジネスや、今自分が歩いているゴルフ場の経営も含まれている。社長は友好関係を築くために巨額の交際費を投じて各階の人士と交際していた。各省の大臣と知り合いだったせいで、彼は信じられないほど危険な薬剤の販売許可を手に入れた。そして、その政治家の政党に寄付する金額はうなぎ上りに増えた。

ある日、朝早く目を覚ますと、彼は自分の政治的基盤の後ろ盾が変わったことを知った。「まったく信じがたい」彼は自分につぶやいた。彼の一〇種類の薬の申請書は一年以上も厚生省のファイルにとじられたままで、事務取り扱いの最終日になっても、まだ政治家が彼との間に約束した「駆け込み」式の署名がされていなかった。「私の手のうちの者に許可の署名をさせるわけにもいかないんだよ。なにしろ私の一挙手一動を国民が見張ってるからね」それが本当の理由でないことを彼は見抜いていた。彼は感情をしっかりと閉じこめた。彼の抱えている問題は、どうすれば政治家を使って彼の基盤を磐石にするかではなく、どうすればビジネスの競争相手を先に政界に影響ある立場から脱落させられるかなのである。彼は人のふんどしで相撲を取るから十分な教訓を得た。

悪い知らせは、先の総選挙の後、敵側の政治家の政党が連立

政権に参加し、再び厚生省のポストを得たことだった。前厚生大臣は三つの法案を提出した。もしその法案が成立すれば、彼の売れ筋の商品の多くが即座に危険性薬剤のリストに編入されることになっていた。「危険性薬剤」は社長が最も嫌う名称だった。そこに分類されることは宣伝の禁止と収益の急激な低下を意味したからだ。良い知らせは、彼が最初から「一股」をかけるやり方でゲームをやってきたことで、何年間も將軍の派閥に属する多くの將校を彼の関連会社の役員に迎えていたことだった。その間、彼はずっと「必要経費」として報酬を払い続けてきた。背後から大衆を扇動するやり方が予想以上にうまくいき、倒閣を要求する声は日増しに高まった。

「この業界では残された方法は二つしかない」社長は朝食の席上で自分の後継者である息子に教え込んだ。

「勝者になるのでなければ敗者になるだけだ。お前はどちらをとる？ 虎か鶏か」

むろん、彼が鶏を選ぶはずはない。

五カ月前に議会解散クーデターは彼の予想した通りに起きた。革命団の將校のうちの五人までがサープデー・グループの会社役員だったので、彼は自分のこれまでのやり方に強い自信を持った。將軍は傀儡政権を樹立し、国際社会からも承認された。社長が將軍とゴルフをする機会は何倍にも増えた。二カ月以内に、その三つの法案は反対者もなく廃案となった。三カ月目になると、長い間ファイルにとじられたままだった新商品が市場

で販売されだした。一見複雑そうな制度も、解説するのは簡単だ。將軍が選挙で権力を国民に返すことで、自分の目標へと歩を進めることを選ぶ決断を下したとき、社長は言った。

「このやり方は閣下にとってはとても素晴らしいです。しかし、ビジネスに関わる者には「社会的正義」という言葉はリスクが多すぎます。クーデターは危険なゲームで、恨みを買わないという保証を得たことは一度もありません」

もちろん、そんなことは將軍には最初からわかりきったことだった。

もう一度、すべてのことが最も自然な形で発生した。その政治家の政党は会議机の上に拳銃を置かれた状態で交渉に臨まざるを得なくなり、きれいさっぱり「接収」された。將軍閣下はその政党の新しい党首の地位に就いたうえで、その政党の管理下で総選挙を実施すると宣言した。政党を乗っ取ることは国を乗っ取るよりも手間がかからず、波風を立てないスマートなやり方だった。大部分の平党員は將軍が次期総理大臣になり、その資産を増やすものと信じて疑わなかった。將軍閣下は与党の立場で彼ら平党員を議会に迎え入れることが確実にできるはずである。社長は勝利を確実なものとするために、自分の後継ぎをその政治家と同じ派閥に送り込んで総選挙に臨んだ（「党幹事」という新たな肩書きで）。

彼は再び成功し、元の政治的基盤を回復した。そして、新しい政治的基盤が自分自身のものとなった。視野には敵のあらゆる

る動きが計算に入っている。慌てることはない。餌食として始末するときがくれば、敵を追いつめて決してしくじらず、正確で、きれいさっぱり片づけ、何の痕跡も残さないようにするのだ。

今は総選挙の日までもうそんなに日が無い。もう一度この虎は餌食を待ち受けているところだ。

「選挙運動は疲れるでしょう？」彼は訊いた。

二人はさらに歩いた。プレイ開始後五時間目、彼らは第八ホール目で点数が並んだ。残りの九ホール目で決断しなければならぬ。

將軍は笑った。

「疲れた。だが、やむをえん。自分で選んだ道だ」

「息子も同じことを。選挙運動で歩き回って、日焼けで見分けもつかないほどです」

「心配するな。あんたの息子はよくやってる」

社長はじつとホールを見た。

「確信が持てないんですよ。何しろ対戦相手がかなりの強敵ですからね」

將軍は笑った。社長が言った「対戦相手」が反対陣営の候補者を指しているのではないことはおおよそ見当がついていた。

「心配するな。われわれは全力でやってきたじゃないか」

社長は微笑みながら軽めにパットを放った。白い玉がゆっくりとすべっていき、カップからわずか六センチほどのところで

止まった。彼は笑った。

「このゲームは私の負けです」

（その夜、社長は夢を見ることもなく熟睡した。床に入る前に妻が訊いた。

「今日のプレーはどうだったの？」

「わしの勝ちだ」彼は目を閉じたまま答え、安らかな眠りについた）

將軍の車はいつでも出発できるように準備されていた。人々の目が車の前部の途中から曲がった虎のエンブレムをとらえると、ドア・ボーイの顔は朝の霧よりも蒼白になった。

「も、申し訳ありません。決してわざとやったのでは……」

社長は平然と言った。

「おまえはくびだ。修理代は給与から差し引く。それでも不足したら、オーバーした部分を弁償しろ」

「社長、何とかくびだけは、お願いいたします」

ドア・ボーイは將軍の方を向き直ると、震える声で「申し訳ありませんでした」と言った。

「放っておけよ。小さなことだ」と將軍は言い放った。

社長は微笑みただけで言葉を返さなかった。將軍の車が去ってしまうと、彼はドア・ボーイに

「閣下のお許しに免じて給与カットは免じてやる。だが、今日でくびだ」と告げた。

「ですが、將軍閣下は……」

彼の手のひらがバツという大きな音を立ててドア・ボーイの顔に炸裂した。

「お前の雇い主は誰なんだ。わしか閣下か」

彼はドア・ボーイが肩の力を落としてひっそりと去っていくのを見つめた。

(気持ちに何か引つかかるものがあつて、彼は真夜中に目覚めた。昏間起こつた出来事を考えた。ドア・ボーイと將軍とあの乗用車。彼は自分がなぜあんなとるに足りないことに必要以上で激怒したのか説明できなかった。自己分析してみても、彼は自分はそのドア・ボーイに怒つたのではなく、奴が將軍のお慈悲にすぎたのが気に入らなかつたのだと結論した。もう一度冷静に考え、大したことではない小さなことに感情を害すべきではなかつたと思つた。あの折れた虎を思つた。あのエンブレムが半分曲がろうが、根元から全部曲がろうが、それは依然として、いつも車の最前部にあるのに変りはないのだ。

彼は自分の隣で眠っている妻を見た。結婚してから三〇年が経っている。結婚した頃の彼は中国人の精米工場主のもとで働く一介の肉体労働者にすぎなかつた。仕事はきつく、一日一四時間、くたくたになるまで米を担いだ。すんでのところで肩の骨が折れるかと思われたが、文句は言わなかつた。それもひとつの投資だと信じていたからだ。投資が実を結んだのは、彼が經理の仕事に昇格させられたときだつた。それ以来、数字が彼

の呼吸となつた。彼はまるで生まれつき經理を知つていたかのようにテキパキと会計を処理した。彼は、たとえ一日の利益がわずか一バーツに満たなくても、年度末に会計を閉めるときは巨大な利益になることを学んだ。雇用主は彼の素質におおいに惚れ込んだ。雇用主が自分の娘を彼と結婚させたとき、彼はほんのわずかの驚きも感じなかつた。すべては前もつて彼の人生計画の中に収まつていたのだ。それ以来、彼の残りの人生はすべて未来への計画に捧げられた。彼は経営学ではなく芸術を学びたいという息子の考えに反対した。娘が同じ学部の子学生と結婚したいと言出したときも、その希望を猛烈に否定した。彼はもう一度、隣の妻の身体を見た。彼は一度も妻を愛してると言つたことがない。だが、そんなことはとるに足りないことだ。彼はまた目を閉じた。夢は見なかつた)

ドア・ボーイは今朝方、わけもわからずに殴つた妻のことを考えた。家に歸りたかつたが、心の中に何かくすぶつていて、抑えがたいものがあつた。弁護士から手紙を受け取つたときと同じような怒りの交じつた複雑な感情だつた。あのとき、彼は何もすることができなかつた。しかし、今度は違う。このとき、彼の頭に政治家の顔が浮かんだ。

鶏 = 將軍

ワインボトルのそばに一枚の小切手が置かれている。社長が

くれた三〇〇万バーツの小切手だ。ワインは政治家がくれた一本四〇万バーツもする高価なものだ。

彼はその芳醇な味わいを堪能するようにワインを口に運んだ。ワインは彼の好物である。今どきもてはやされるファッションであるからだけではなく、むしろ彼の人生がますます輝きを増してきたせいであると言える。

ゴルフ場を後にする前、社長は彼に一通の白い封筒を手渡した。

「賭け金です」

彼は微笑んだ。命令すればホールインワンもできる腕を持った人物が、わずか六センチの差でホールを外すわけがない。彼は商人が細心の注意を払ってゲームをしたのを見逃さなかった。勝ちを得たいためではなく、見え見えの負けに見せないように気配りするためである。彼はつぶやいた。

「奴はいつも最終ホールで自分の負けにしてゲームを締めくくるすごい奴だ」

テーブルの上の小切手は党に継続的に渡されている寄付金の一部にすぎない。今回の総選挙の後、社長の後継ぎは厚生省の副大臣に就任した。三〇〇万バーツは一人の人間の政治的ポジションの代金としては決して高くはない。しかもその人物は社長自身の血筋の者なのだから。時として彼は、自分はいったい何をしているのかと心の中で自問自答するのを抑えられないことがある。彼の息子が言った。

「お父さんのような人がどうしてあんな連中と付き合うのかばくには理解できないよ」。

息子はまだ二一歳の若造だ。彼と同じ陸軍士官学校を卒業し、同じ血を分け合った血族である。何から何まで士官学校を卒業した当時の彼となんと似ていることが。彼がクーデターを決行したとき、息子は彼の人生から消え去った。そうさ。彼だつて自分が変わったことは分かっている。しかし、変化するということは良いことではないのか。彼も一度は主義を重んじる民主的な軍人グループに属していたことがあった。半生を終えた頃、正義感に燃えて山頂に砦を築こうという希望を持ち、政治の世界に足を踏み入れて以来、ほとんど道から外れてしまった。彼は「システム」の暗黒界に飲み込まれて、自分を見失ったことに気づいた。それから数カ月後、彼は軍隊の堀の中の、黒と白しかないような単純で融通の利かないやり方とは異なる新しいルールを学んだ。彼は政治のやり方も戦争と同じだと思つた。彼にとつて有利だつたのは、将棋盤をひっくり返す力を持つて政治活動をしたのが彼一人だけだつたということだつた。毎年、贈り物が絶えることなく彼や妻子に贈られてきた。いつも誕生日や結婚記念日や新築記念日を忘れたことのない社長のお祝いの言葉が添えられていた。ビジネスの話で会つたときといわず、社長の別荘で泊まるときといわず、部屋には常にベッドに美女が横たわつて彼を待ち受けていた。ある人物がこう言つたことがある。人生の味と好みはたいいてい権力についてくるものだ。

彼もそう思う。手の中にあるワインもそうだ。おれに権力と呼ばれるものがなければ、いったいどの馬の骨が一滴で二〇〇パーツもするワインを飲ませてくれるというのか。そうなのだ。どんなものにもそれにふさわしい値段があるのだ。彼は連中に頼りたいのではまったくなかった。彼の息子のグループの人間が一度、新聞のインタビュに答えて政治家を「社会をむさぼる虫けら」と侮蔑的な発言をしたことがあった。彼は「政治家が虫けらなら、父さんはいつだってそいつをついばむ鶏になるうじゃないか」と言って笑い飛ばした。彼の息子はいっしょに笑うことはなかった。

虫は今では彼とともにワインを楽しんでいる。満足そうに微笑みながら。

「いかがです、閣下？ お口に合いますか？」

「最高だよ」

その瞬間、彼はタイが最近輸入したという一本六〇万パーツのワインは、今飲んでいる高価なワインよりどれくらい美味しいのだろうかと考えた。

去年の半ば、タイの空の上をどす黒いクーデターの気配が覆ったとき、政治家はある大学でマスコミに対して「私は議会制度に則ってやってきました。民主主義に自信を持っています。私はクーデターによる政治を憎みます。私はいかなるクーデター集団とも決して手を組まないことをこの旗の下で誓います。身体を張って一人でも反対します。私の言葉をよく覚えてお

いてください」と言った。

政治家は、その日集まっていた学生や教授やテクノクラートたちから割れるような拍手を浴びた。

クーデターが成功した翌日、將軍に届けられた最初の花ごこにはその政治家の署名があった。

「国を守るための閣下の自己犠牲心に感謝申し上げます」

そのカードは彼に、どうしようもないほど全身の毛が逆立つ思いをさせた。

（その日の深夜、將軍は寝つくのに長い時間を要した。多くの人物の顔が次々と頭に浮かんだ。黄昏頃に家に帰ってきたとき、ジャガーの新車が車庫で彼を待っているのが目に入った。

ハンドルの前に一枚のカードが挟んであった。見覚えのある社長筆跡だった。

「今日は従業員が閣下のご機嫌を損ねましたこと深謝します。私からのお詫びのしるしとしてお受け取りいただければ幸いです」

彼はあのドア・ボーイを思い起こした。一瞬、かわいそうに思った。どうしようもないんだよ、人間はみな辛いことを背負い込んでいる。自分もそうだ。ベッドに横たわって彼を待っていた多くの女のことを思った。近年来、彼は自分の身体の一部の能力が急速に衰えてきたのを感じていた。はじめ、彼はその事実を受け入れることができなかった。何百万パーツも出して漢方薬を試したり、動物の生殖器に始まり、それまではこの世

に存在することさえ知らなかった奇妙な植物種にいたるまで、あらゆるものを試した。それでも役に立たなかった。最後に彼と一夜を共にした若い女は、女優でもあるハーフ系の高級コールガールで、一晩で一〇万バーツの値段で社長から贈呈されたが、朝になって彼女の憐憫の笑みを見たたん、彼は事実を受け入れない自分に腹が立った。彼は国中の人間の上に君臨していたが、自分自身の身体は思うように支配できなかった。年をとつてもセックスと権力の欲望がまったく衰えないのは考えてみれば不思議なことだった。それ以来、彼は自分の一切の時間を政治ゲームにつき込むようになった。彼は息子のことと、息子の言つたたくさんの言葉についてあてもなく考えた。

「父さんはね、ただ他人の手の中のヒヨコにすぎないんだよ」

そうだ。彼にはわかっている。この世にはただで手に入るものなんかありはしない。彼はそのルールを受け入れざるをえない。一度暗闇の中でため息をつき、それから最後には眠りについた。

二人は政治問題に関してもまったく避けることなく、すべてのことを語った。ネコのことから宇宙人のことまで。政治家は話し好きで物知りだった。最初のワインボトルが空になると、彼らはいつものようにヤドカリとイソギンチャクについて話をした。政治家が先に口を開いた。

「私はこの話を小さいときから父に聞かされた。よく覚えている。その頃の私にはとても面白い話だったから。私の父は生物の教師だった。私はそのせいで他の子供たちより、たくさん生物学を学んだ。君は面白いと思わないか。イソギンチャク（注：タイ語で海の花の意）は花ではなく動物で、ヤドカリ（注：潮州方言でカニの意）の方は本当にカニなのに、貝殻の中にすんでいることを」

二人は顔を見合わせて笑った。政治家は話を続けた。

「イソギンチャクには毒針を持つ触手があつて、ほかの動物を餌として食べる。ひとつだけある例外が、特にイソギンチャクの毒だけを解毒する物質を持ったプラーカートウーン（注：漫画魚クマノミの意）だ。自然は実に不思議だ。毒がある一方で、それを解毒するものもある。どこまで話したかな。そうだ。イソギンチャクはあつちこつちと場所を移動することはできない。そこで貝殻にとりついていて。ヤドカリもその貝殻の中に住みつこうとする。ほかの動物に邪魔されなからヤドカリは安全だ。同時にイソギンチャクもまたついでに樂にあちこちと移動することができる」

「わかっている。そいつをパラサイト（注：寄生）とか何とかいうんだ」

「違う。君の理解はごちゃ混ぜだ。シムバイオシス（注：共生）といつて、パラサイトとは別だ。言ってみれば、ムクドリと水牛、コバンザメとサメとの関係と同じだ。お互いに助け

合つて生きている。パラサイトは一方的な寄生だ。たとえば宿り木はとりついた木から養分を吸い取つて、最後には枯らしてしまふからな」

將軍は笑つた。そのとき、彼は今ここに息子を座らせて二人の話を聞かせたいと思つた。もしかしたら世の中のことをもつとよくわかつてくれるかもしれない。次の瞬間、彼は政治家がどうしてこの話を語つて聞かせたのか、その理由を考えた。礼をして別れると、彼は座席に座つたまま自身は共生に当たるのか、それとも寄生に当たるのかを道中ずつと考えた。

虫 = 政治家

彼が三〇年前に政治の世界に足を突つ込み始めた頃、彼の父は強力に反対した。父は「票の地盤も何もないというのにおまえはどうやって代議員になれると思つてるんだ」と言つた。

彼はこう返答した。

「父さんだつて何もないところから身を立てたじゃないか」
あれから三〇年が過ぎた。今では政治家は、政治的手法で築き上げた財産の前に立つていた。屋敷、政党、地位、権力そしてその小切手まで。

今や彼の生活は三十年前と比較すると、雲泥の差ほどの変化があつた。それでも、自分が人生をどのように始めたのかを忘れることはなかつた。党首という言葉は何年もきつい仕事をし

てきたことへの褒美であつた。一人の男がやつてきて彼の手からそれをはぎ取るまでは。彼の気持ちは彼の妻とベッドを情夫に取られたのと同じだつた。いや、彼は議会外の権力をこれっぽつちも恐れてはいなかつた。恐れるよりはるかによく、「システム」を理解していた。彼はドアを間違えて入つた者たちが失敗した実例を山ほど見てきた。彼はただ、彼の党の部下たちが彼を「党議長」と呼ぶことに少しイライラを感じていた。

息子が政治家の仕事に関心があると言つたとき、彼は軽く微笑んでから子供に訊いた。

「なぜ政治家になりたいんだ？」

それは三〇年前に彼の父が彼に訊いたときとまったく同じ笑みと言葉だつた。父は国民学校の理科の教師で、欲が少なく質素な生き方を好み、彼が政治の世界に首を突つ込もうと考えたことにはじめは反対した。しかし、彼の決心が固いことを知ると、それまでの半生でこつこつ貯めたお金を選挙費用として彼に渡した。立候補した最初の選挙で彼が完璧に敗北した後、彼らはまた一から出直さなくてはならなかつた。父は一言も愚痴をもらしたことはなかつた。父は、人間は教科書よりも経験からよく学ぶものだということを信じる人間だつた。最初の失敗が彼を用意周到な人間に変え、政治に焦りは禁物だという教訓を彼に与えた。

ある夜、彼は父が教える準備をしていたテキストを読んだ。シムバイオシス（共生）の原理について説明した生物学の副読

本だった。それは生態系において非常に巧妙な形で互いの利害関係を結びつけることであることを知った。「利害関係」とは大きさも生態も完全に異なる二つの種の生き物が、共に協力し合って生きていくことを可能とするただ一つの言葉である。彼は夜を徹して政治の世界の原理というものを学んだ。その路線は最初から考えていたような直線ではなく、コツコツと積み上げていくしかない学問のようであった。時が経つと、彼はさらに政治の世界とは駆け引きの世界だということを学んだ。成功を勝ち得る政治家には柔軟な性格が必要とされる。人と違った強烈な個性などではない。しかもそれは努力して獲得することができるものである。

その後の数年間、彼は話し方、歩き方、食事の作法、笑顔の作り方、笑い方、視線の交わり方、合掌の仕方から賢明に見える話題の選び方までをひととおり学んだ。彼はがむしゃらに働き、次の選挙では念願がなつて当選した。それで降は決して一度もしくじることにはなかつた。彼は地方区の議員を五期にわたつて勤め、常に国内で高得票を得る上位一〇人の議員に名を連ねた。彼の口癖となつている言葉は「問題を抱えている方はどなたでもご相談下さい。私が約束を守らないときは、私の家を叩き壊して下さつて結構です。私の家がどこにあるかは皆さんご存じのはずです」であった。

ドア・ボーイは問題を抱えていた。それで政治家の家がどこにあるかも知つていた。

政治家は今日二人目の来客に合掌の挨拶で答えた。客はいかにもぎこちなく合掌で応じた。ドア・ボーイが言った。

「本当は区長さんのところへ先に行くべきなんですが」

彼は、今ではゴルフ場になつていゝる広大な土地をめぐる、この男と社長と区長が関係した出来事を熟知していた。その出来事とは、彼の息のかかった人物が、一〇種類以上の新薬の申請書を厚生省のファイルにとじ込んでおり、そのことで、社長と仲間割れを起こす前に起きた事件だった。彼は近づきつつある選挙のことと、社長の息子が自分と同じ派閥にいることを考えた。

「心配しなさんな。そのことは私に任せなさい。何とかするから」

彼が訪問客の肩を叩いてドアの外まで見送ると、客の表情にはホツと安堵する色が見えた。あるいはドア・ボーイは援助が欲しかったのではなく、慰めの言葉をかけてもらいたかつただけなのかもしれない。

(ドア・ボーイはその夜、政治家の夢の中に登場した。村人の男が膝を屈して彼の援助を願ひ出た。ドア・ボーイの顔は彼自身の父であった)

彼は驚いてがばつとはね起きた。選挙で初めて勝利を得てからというもの、もう何十年も、死んでいなくなつた父のことを考えたことはなかつた。父は彼に「タイーの立派な議員になれよ」と言い、彼もそう約束したのであった。

彼はトイレに入った。小便が勢いよく飛び、それからおもむろに弱くなつて最後には止まつてしまふ様子を眺めていると、彼はやおら大きな笑いを爆發させた。それから自分につぶやいた。

「何もやるにも時間がある」

彼は將軍の支援を得ることで、確實に今の地位の在任期間を全うできる。それが党を乗っ取られたことに対する報酬だ。喉から手が出るほど欲しい、首相の地位を得るためにも割が合うだろう。だが、彼にとってはその時期は今ではない。まだまだ道のりは長い。今の彼は黨員に祭り上げられている、一丁上がりの名誉職にすぎない。だがいずれば、彼らは彼をふたたび党首に返り咲かせるだろう。特に、將軍が議會制のたてまえを利用して舞台上にいる時間を長引かせることを決意したときに。彼はまた目を閉じ、一匹のヤドカリが藍色の海の中をきままに動き回っている夢を見た。貝殻の上にはあでやかな色をしたイソギンチャクがこれも自由に舞い踊っていた。

三番目の客の顔を見たとき、彼はドア・ボーイの問題の解決法を考えた。

区長は村の長であり、選挙参謀であり、商売人であり、この県にある一切だった。最も重要なことは、区長が二〇年以上も国内のトップ当選者一〇人の中に入るだけの票を彼のために案配してくれる人物であるということだった。

「今日の午後、あなたの口座にもつ一度、金を振り込む。三

〇〇〇万バーツだ」

「一人頭二〇〇バーツとして……」区長が計算する。

「一五万人か」

彼は、この三番目の訪問者が仕事の進み具合を報告するのを気分よく受けた。客が帰る前、彼はドア・ボーイのことを区長に聞かせた。区長は何とかすると引き受けた。

その日が終わる前、彼は自分がタイ随一の立派な国会議員であると信じることができた。

僧 区長

車を運転しているとき、彼は心のおもむくまま自由に考えるのが好きだった。訪れては過ぎ去つたさまざまなことをあれこれと考えた。運転中は彼の頭が空になる唯一の時間だった。

政治家の家を出ると、区長は自分も建設に關与した新設の ASFALト道路を歩き回つた。果樹園は急速に変貌していた。

タピオカ畑ははるかあなたに身を横たえている。いろんな色の家屋があちこちに散らばっている。この町はいま急速に変わりつつある。多くの土地が工場、リゾート施設、大規模農場、商業施設、映画館になりつつある。彼は運転を続けた。「一、二、三、四……」彼は橋、公園、学校、道路などの数を数えた。自分の家に着いたときは一五まで数字を数えていた。わずか六キロほどの距離に彼がなした一五カ所の事業が見られた。半分飢

え死にしかけていた寺子にとっては全く悪くない話だ。時として彼は自分がやったことが投資だったのか、それとも自分が生まれた土地への恩返しだったのか、しかとはわからなくなった。

区長はこの県に生まれた。離乳の前から両親はいなかった。五歳になると、食べ物がなくて飢え死にしかけた。住職が犬と食べ物を争っていた彼を見つけた。彼は寺子という身分で成長した。あるとき、彼は住職の金を盗み出して賭場で遊んだ。明け方頃、儲け金を持って帰ると、盗んだ金の分を返した。その時以来、彼は自分はこの先もう二度と我慢する必要がないことを知った。成長すると、住職はバンクコクのある僧侶に彼の身柄を託した。数年を過ごした寺で彼は喧嘩の才能を磨いたほかには何の勉強もせずに帰った。彼は教室よりは路地裏で時間を無駄に費やした。あるとき、彼の友人がほかの学校の生徒に刺し殺された。胸章についていた学校のイニシャルがどうのとうささいな理由からだった。彼は駆け出していくとただちに復讐した。敵の死は彼を満足させた。しかし、彼が使った手製爆弾が爆発したとき飛び散ったガラスの破片を浴び、血の海と化したバスの中で死んだある女子学生の姿を見たことが、長い間、彼の思考を停止させた。その後、彼はどのようなやり方でそれからの後の人生を生きていくべきかを知ったのであった。

彼は再び生まれ故郷に戻った。警察官や公務員の人々と積極的に知り合った。周囲の知人からはビジネスや政治を学んだ。三十歳前に彼にはすでに一〇〇〇万バーツ以上の金があり、死

んだ前区長に代わって区長になった。それ以来、彼は彼自身のやり方で県にも発展をもたらした。あらゆる種類の人間と付き合った。彼が彼らを保護することができるかぎりにおいて、彼がどんなビジネスをしているのか、どうして結婚しようとしているのかに興味を持つ者はいなかった。彼のもとへやってくる政治家は、彼を最高の性能を持つ武器と見なしていたのかもしれない。しかし、彼にとっては彼らこそが彼の手段にすぎなかった。

部屋の真ん中の大きな机の上に大きな札束の固まりが置かれている。窓はすべて大きく開かれている。彼の家には一度も鉄格子や鍵がかけられたことはない。彼の部下がお金を分けては一束ごとにゴムひもをかけている。一束で二〇〇バーツである。縛り終わると、段ボールの箱にそれを投げ込む。三〇〇〇万バーツを全部縛り終わるには、彼の部下は何週間も時間をかけねばならないだろう。ときどき、彼は大蔵省に二〇〇バーツ札を発行してもらいたいとさえ思った。

「そうすればおまえたちの仕事はずっと楽になるな」そう言って、彼は自分の部下といっしょに笑ったことがある。

三〇〇〇万バーツ。一五万人。それは彼の手を通過した最高の金額ではない。彼はいつもこの手の金を受け取ってきた。土地の購入資金であったり、人間を買う金であったり、選挙の票を買収する一〇〇バーツ紙幣二枚だったりした。何の資源もない県にとってはありがたい金であった。二〇〇バーツがあれば

農民は米やナムプラー（魚醬）やカレー粉や塩漬け魚やエビ味噌や魚の缶詰を買うことができた。以前と同じほど多くはないが、それでも彼に腹の底からの満足の笑みをもたらすには十分であった。

彼は部下に作業をやめるように言った。

「ゴムひもをはずせ。一束一五〇バーツに変えるんだ。前回と同じ額にしる」

彼の部下は文句も言わずに命令にしたがって作業した。

犬が連続して吠える声が聞こえた。数人の村人がやってきたのを見ると、彼は立ち上がった。褐色の顔をした一人の中年の村人が「わしのせがれのデーンが高熱を出しうなされとります。肺炎じゃないかと」と言った。

彼は一〇〇〇バーツをつかむと終りまで聞かずにすぐに村人に差し出し、部下を大声で呼びつけた。

「おい、今すぐに子供のところへ行つて病院に送り届けるんだ」

ここでは、彼は村人が困ったときに一番先に駆けつける人物だった。便所の汲み取り人に家賃を払う金がない。ドア・ボーイの女房に出産費用がない。カレー売りの米櫃が盗まれた。売春婦の女がヒモに殴られて入院した。ヤシ売りの男には父親の棺桶を買う金がない。彼は人々が口癖のように彼のことを「区長の所へ行け。あの方は仏様のような方だ」と言つのを耳にするが好きだった。彼はこれまで村人からの援助の依頼を一度も

断つたことがない。なぜなら彼が頼みごとをするときも、誰ひとり断らなかつたからだ。

（その夜、彼は寝つけなかつた。犬が吠えたせいではなく、疲れすぎていたせいかもしれない。意識の深い池の底で静かに眠っていた過去の沈殿物が、かき回されて再び浮上してきた。

子供の頃の生活、犬の餌、盗んで賭場に遊びに行った住職のお金、重くなるように細工していつも賭けに勝っていたサイコロのことまで思い出した。それから回想はめぐって、バスの中で死んでいた女子学生のことまで溯つていった。一切が二〇年以上も前に過ぎ去つたことなのに、まるで昨日のこのように明瞭に思い出されるのは不思議だった。ガラス片とバスの中の血だまり。女性の泣き叫ぶ声。それらの光景を頭から振り払つた。考えてみるとおかしかつた。彼は寺で大きくなつたのだ。もつと仏法になつたましな生き方があつたのかもれない。だが、彼は仏法に背を向け、自分自身の道を選んだ。記憶の沈殿物が再び浮かび上がってきた。彼がドア・ボーイやほかの多くの村人の手からもぎ取つて社長に渡した、多くの土地のことを考えた。自分はどうしてそんなことをしたのか？ 連中は、彼がまじめにそれを実行したと信じることが絶対でないだろう。彼は社長がここにつくると約束した新しい帝国のことを考えた。サブディーの工場やいろんなプロジェクトが、大きな波が押し寄せるように途切れることなく続いてきた。全員を仕事と永遠の収入が待ち受けている。これらの人間の笑顔の数は、少数

の人々の涙で汚れた顔よりも多いのだ。半分飢え死にしかけていた寺子にとつては悪い話ではない。彼は最後に眠りにつく前の闇の中で微笑んだ。

金の分配が終わると、彼は市場に立ち寄った。多くの男たちが集団を作つてコーヒーショップでタイ・ボクシングを見ながら、「ヤレー……そこだ！」と声を張り上げている。村人は彼の姿を認めると合掌した。区長は手を振つてそれに応えた。豚肉屋の息子はどうしているだろう？ 汲み取り屋の娘は学校へ入学したかな？ エビ味噌売りの母親の痛風は治つたのか？ 布折り屋は頼母子講でちゃんと金をもらえたか？ なんだ、この男はどうして一人で酒を飲んでいるんだ？

酒の匂いが広がっている。店主が言った。

「昼過ぎからずっとじつなんでさ」

彼は酔っぱらいの所へ近づいた。

「一人で飲んでもつまらんだらう。悩み事でもあるのか？」

ドア・ボーイは話をしたくなかった。たくさんの考えが朝から頭の中を駆けめぐっていた。

「また、仕事の悩みだらう。一、二日寝てれば良くなるさ」

ドア・ボーイはこの午後に思い当たることがあった。彼は、政治家が助けてくれると確かに約束したときに気が楽になつていなければならぬはずだった。しかし、何か腑に落ちなかつた。家を後にして十歩も歩かないうちに彼ははたと思い当たつた。社長の息子が出馬するのは政治家と同じ派閥じゃないか！

彼の頭は彼の二〇ライ（注：三二〇〇平方メートル）の土地が空中に消えてしまったのと同じように真っ白になった。今彼が運命を呪わず、誰かに怒りをぶつけないのは不思議だった。彼は苦渋をにじませて笑つた。

「絶対それ以上寝てることになるさ。今日、くびになつたんだからな。いったいどこで金を稼げばいいんだ」

「だが、酒を飲む金はあるわけだ」

「しかたがない。むかつくんだ。女房に当たるだけだから家には帰りたくない」

区長はポケットから札束を差し出した。

「これで少しは機嫌を直してくれるか」

ドア・ボーイはまた酒を注いだ。

「奴に投票しろと？ ついさつき奴の親父にたたき出されたんですぜ」

区長はもう一つの札束を出した。

「お前は分別ということを知らなくちゃだめだ。仕事の話と金の話は別問題なんだよ」

ドア・ボーイはしばらく考え、それから札束をポケットにねじ込んだ。区長の話はいつも理屈が通つている。

ドア・ボーイが千鳥足で帰宅したとき、家の前の木から最後の葉がヒラヒラと渦を巻いて落ちた。外は暗くて寒く、完璧に静かだった。靄がまた流れだし、白いカーテンの中に一切を飲

み込みはじめていた。彼は帰宅する前に何かやることを忘れていたことに気がついた。だが、それが何なのか思い出せなかった。彼はズボンのポケットの金をまさぐった。飲み代を払ってもまだ残りがあつた。顔を上げて、すっかり葉の落ちた木を見上げた。明日はもう仕事に行く必要はなくなったが、当面食べるものを買う金はある。

彼は家の前のごみ箱に捨てられた白の破片を横目で見て、急に静かになった。妻に新しい小白を買ってくるのを忘れていたことを思い出したのだった。まあいいさ。明日でもいい。コーヒーストップを出る前に、ドア・ボーイは薬を一箱買ってくるように店の者に頼んでいた。その時、彼は思うところがあつてサードデーを買わず、代わりにライバル・メーカーの薬を頼んだ。初めて気が済んだ気がした。その夜、彼は気持ちよく眠った。

五時に目が覚めると、頭がぐらぐらし、胸がむかついて吐きたくなつた。

作家紹介

タイではサリット陸軍司令官が一九五七年のクーデターで軍事政権を樹立、その後外資を導入した開発政策が始まった。七三年まで続いたこの体制の下では結社や表現の自由が大幅に制

限され、多くの知識人が逮捕された。中国に亡命し、そこで客死したシーブローパーのような作家もいた。

ウィン・リョウワーリンが生まれたのはそのクーデター前年の五六年である。ウィンは大学の建築学科を卒業後、シンガポール、ついでアメリカで広告業界の仕事に従事していたが、八五年に帰国。斬新な技法を駆使した処女短編『肉欲と涅槃』（邦訳『ウィン・リョウワーリン短編集：インモラル・アンリアル』）で文壇にデビューした。その後刊行した三冊の短編集も好評で、ハッピーエンドのラプストリーが社会批判の小説に偏りがちだったタイの文学界に新風を吹き込んだ。

その名を一気に高めたのは『平行線上の民主主義』（九七年東南アジア文学賞）という長編小説で、立憲革命後のタイ政治裏面に挑戦した意欲的な作品であつた。二〇〇二年にはふたたび、世界共産主義運動とタイの反政府運動の絡みを描いた『赤い翼』を書いている。これらの歴史小説は、ビジュアル効果を意図した技巧小説をはじめ実験的な作品が多いために内容が軽いと評されることもあるウィンが、実は骨太の思想を持った作家であることを証明している。

二〇〇二年より夫人の母国であるシンガポールに本拠地を移し、自己の文学観を述べたエッセイ集、若手作家との往復電子メール書簡集を出すなど精力的に創作活動を続けている。日本には国際交流基金の招きで二〇〇〇年に来日した。

この『僧子虎鷄虫のゲーム』は、短編集『人間と呼ばれる生き物』（九八年）の最初に収められている作品である。